

【目的】ズボン原型の「股ぐり線」について人体計測及び着用実験を行い、くり幅は、腰部最大矢状径の80%を用いたならば縫合することによって100%のくり幅となって適合し、後股ぐり線の傾斜角度は、腰部体型への適合には腰部正中角度/2が、動作への適応には腰部正中角度/2に更に+5°が原型として適することをこれまでに報告した。今回はズボンパターンのくり幅についてその前後の比に関する2、3の調査及び実験結果を報告する。

【方法】①腰部最大矢状径の、転子点を基準点とした前・後の計測（青年・中年・老年各100名）、この計測値と股上前後の長さ・大腿囲・その他の周径との関係及び経年変化の観察。

②発表されているズボンパターンのくり幅の前・後の比の調査(10例)とその解釈。

③前後の比を1:1、1:2、1:3としたパターンの着用実験（体型の異なる青年女子10名）。

【結果・考察】①の結果、各平均値を前後の比で表すと青年1:1.13、中年1:0.90、老年1:0.87となり、前後の比と計測値のバラツキに経年変化が認められる。③の結果からは、股ぐり線のくり幅と傾斜角度が各被験者に適合しているズボンの着用実験では、くり幅の前後の比の違いによる有意の差は認められなかった。大腿囲と腰部最大矢状径との関係をみると、青年は大腿囲が大で矢状径が小であり、老年はその逆である。従ってズボンパターンでは、青年の場合は大腿部を包む点に、老年の場合は腰部の厚みを包む点に問題が起こりやすい。「成人女子」を対象とするパターンは腰部のすべての突出部を含む腰部最大矢状径及び外包囲が適合性に深く関わる人体因子であり、くり幅の前後の比は、実験範囲内では裁断・縫製・着用感などの有利性を考慮して決めても良いといえる。